

第43回 MASセミナー

1000年先に受け継がせたい 「手仕事」という教習

日時：2026 / 7 / 11(土)
14:00~16:00

人工知能が論文を書き作曲をし、医師に変わって診察までしようという時代、ヒトが頭の中でする仕事であればほとんどの部分はAIが代替できるようになるのは時間の問題です。時間をかけて習得した技能が一瞬で機械に取って代わられる状況は、技術進歩を哲学論争の対象にしていきます。いま私たちは人類史上の壮大な断絶の時代を生きているのかもしれない。

そこで今この時代だからこそその課題として「失いたくない手仕事」をピックアップしてみたいと思います。ノスタルジーではなく、手を持つ生物として1000年後の人類に伝承したほうが良いと真剣に思えるもの。私たちは日本という「伝世」の文明が1000年以上続く国に生きるものとして、人類史的な貢献を果たすことができるかもしれませんから。

テーマ設定：黒木 正郎
司会進行：田口 知子



ミケランジェロ作「アダム」の部分
神は、手を介して人間に命を吹き込んだ

手は考え、感じ、表現し続ける

手は脳の延長であるという人がいる。たしかに、建築家はしばしば手が脳と一体になって思考しているのを感じる。しかし手は考えるだけでなく、さわって感じることもできるし、表現することもできる。そうした生体としての複合的で境界の無い能力は他に置き換えることはできないだろう。たとえ千年後の未来でも私たちが生き物であるかぎり、食べたり人を好きになったりすると同様の自然な欲求として手は仕事し続けるに違いない。

小川 真樹



1000年の時間の先に・・・

玉虫の厨子は、約1400年前の飛鳥時代の職人技を今に伝える貴重な国宝である。一方、村野藤吾設計の新高輪プリンスホテル「飛天の間」の天井も、アコヤ貝（マド貝）による装飾が施された昭和を代表する職人芸の結晶であり、現代の玉虫の厨子とも言うべき文化遺産である。再開発を理由にこうした貴重な空間を失ってよいのだろうか。文化遺産を次代へ受け継ぎ守ることは、私たちの責務と考える。

武田 有左



発想は「紙わざ」で

1000年前は平安時代中期で、藤原一族が政治を握っていて、平等院鳳凰堂などが建てられたが地方は乱れていたと読めば、人の体力や時代認識まで読めそうだが、1000年後がどうなるかは全く分からない。AIに任せっ放しで、人間はどうなるのか。恐ろしい話は分かる。人間が残っているなら、我々の本業にも関わることで、今、出版テーマとして考えている「発想をAI任せにはいけない」ことの延長として、「アイデアの思考は、まず紙に手書きで」を維持したい、と願う。

大倉 富美雄



「粋」な人、その気質が作るもの

「粋」は江戸時代に生まれた日本の美意識のひとつ。気が利いていてオシャレで控えめなことである。そのルーツは江戸時代の深川芸者にあるという。粋な心意気が少なくなった現代、それでも粋な人は存在し、その人が作るものは残っている。その気質とその気質が作るもの、これが1000年後にも残したいものである。洗練され格好良く、人情を感じるもので、日本人しか感じられない感覚。粋を残したい。

宮田 多津夫



手仕事のもたらす時間

自分が還暦も近い歳になり、友人と伝統芸能を観る機会が増えている。駒場民芸館に行くと、素朴な生活に近い道具を、手づからつくってきた手仕事の美しさにほっとする。AIやスマートフォンがわたしたちにもたらしているのは「簡単に、早く、大量に何かを処理できる」ことだ。が、本当にそんなに多くのものをつくる必要があるのか？自ら手で作る時間を失うことは「生きる時間」を失うことかもしれない。

田口 知子



〇〇さんのスケッチ・クロッキー

自宅リビングに馬のクロッキー（速写画）がある。洋画家、安田謙の作品で、氏が亡くなった後、息子さんから頂いた。息子さんは高校時代の友人で、家に遊びに行った時、安田謙は私にクロッキーを見せ、「この絵の前に何枚も失敗作があるんや」と言った。AIは失敗せず一発で答えを出す。しかし人間は失敗することができる。失敗が何かを生み出す。どうやら、残したいものは「〇〇さんの失敗から生まれたもの」なのかもしれない。

連 健夫



食卓を囲むこと

私が1000年先まで受け継ぎたい人の手のわざは、「誰かのために料理をつくり、食卓を囲むこと」です。AIが献立を考え、調理を自動化する時代になっても、誰かを思いながら手を動かし、一緒に食卓を囲む時間には代えがたい価値があります。料理は栄養を摂るためだけではなく、人と人をつなぐ文化です。その温かな営みと、人が集い語り合う食卓という場所を未来へ受け継いでいきたいと思います。

大塚 泰子



「修理」という神事

父の形見だった夏物の上着を修理した。高齢の職人は擦り切れた袖口と襟足見て何が出来るかを簡潔に説明してくれた。料金は一万円とすこし。二週間後に仕上がってきた上着はプライスレスの価値を備えていた。新品はみな同じだが中古品はすべて異なる。ものに積みあがる物語が個性を作る。日本ではどんなものでも100年使うと「付喪神」という神になるといわれる。人が神を作ることができる文化を持つなんて、途方もなく幸福だと思う。

黒木 正郎



1000年続く仕事とその源流

千年続くということは技術(文明)と生活(文化)の融合と言う状況が生み出されてのことだろう。それは日本の国(風土)の中から産まれるものこそが僕らに与えられた歴史的な環境と言えとの考えが前提に有る。そのうちで千年の時に育まれた『日本の木の文化』こそ、よく理解することが一つの未来を考える手立てとなるだろう。現代の社会で木そのものの本来性は見えなくなってきたが人の記憶に残る多くの技術や工夫、知恵などは現代の高度な工業社会にもその精神は繁栄していると言えるだろう。

今井 均



柳宗悦 著「手仕事の日本」
日本人の手仕事作り出した民藝の世界